昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可
昭和五十六年十一月十五日 発行（毎月一回・十五日発行）

慈光

第三十三巻 第十一号

（通第三八九号）

目次

63.8.12 ◎智愚の毒を滅す……近角常観……(1)

「願にほこる」とは

学問と信仰……福島政雄……(11)

凡骨日誌抄（9）……西元宗助……(14)

63.8.16 ◎人間というもの……井上善右ヱ門……(18)

念仏詩抄……木村無相……(21)

印度の差別の現況……花田正夫……(23)

智愚の毒を滅す

近角常観

一　わかるわからぬで助かるのでない

「智愚の毒を滅す」とは、ここは昨年の夏季求道会の時、最後の講話に申したる『信巻』大心釈の最後のお言葉であります。昨夏求道会の最後の止め言葉となった御文であります。先ず今日私が、このお言葉につき聞いて頂きたいと思う肝腎の事柄は、我々が広大の仏のお慈悲に対するにあたり、我々がこのように浅間しく、分からぬことではしょうがないと思って、自分の分からぬことや、自分の罪深く、自分の煩悩の止まぬ事を悲歎するという、この自分の愚かなことを歎く、ということがある。

けれども、仏のお慈悲は、その私の悪しく浅間しく罪深きところ、私の最も心配になってしょうがない処、周囲の誰もが最も了解してくれぬ処、すべてかくの如く私の最も暗黒なる処をば、仏の方で先きに知し召し下されて、其処をばお見捨てない広大のお慈悲故、ここを頂く一念に、如何なる愚かなる者も、その広大なる御哀れみに満足し、その遣る瀬なきおこころ一つに安心して、大丈夫に喜ばせて頂くことが出来るのである。又自分の心に於て「そのことは能く分かって居る。その事は能く承知して居る。仏は必ずこの者を助けて下さるに間違わぬのである、あゝである、こうである」と、自分では能く分かった積りで居るのであっても、もしやその分かったが智慧をまじえて、自分の心で「そう思うている」のであったり、自分の合点了解であるならば、それは自分の心で、そう思い、そう決め込んで居るまでである。そう思うて居る心は、矢張り仏を疑い隔てて居るこちらのわたくし心に外ならぬのである。

故にかくこちらの方より分かったなどと思う、その心を遣る瀬なく哀れみ思召し、お見捨て無き広大の慈悲に遇いたてまつり、ここでその心の夜明けさせて貰わねばならぬことである。また「こちらは分からぬでもよいのである」などと思うて居るのも、矢張り凡夫の智慧でそう思うているまでである。仏のお慈悲はたとえ分かっても、分かったところが有難いのではない。また分からぬと云うのも、凡夫の智慧でそう思うているまでである。仏より御覧下さる時は、我々の分かる分からぬで、助かるのでない。我々の分かる分からぬや、我々の善し悪しは、つまりお慈悲の上より云う時は、凡夫のあさはかな智慧で、そうこしらえてそう思うているまでのことである。で、その哀れなる様をば仏の方より能く知ろし召し下され、その私の善いと思うが善いでなく、その悪いと思うが悪いでなく、そのして見ようのない有様をよく御承知の上で、お見捨てなき広大の御真実を聞く一念に、私の智慧も愚鈍も、そのやるせなきお慈悲に滅せられ、仏智不思議の有難やと喜ばせて貰えるが仏の広大のお慈悲である、との事を丁寧に話したいと思うのであります。

然るところ、今も申すごとく、私の近頃ことに有難く思うことは、今年は先ず第一に、近きは私の一家を始め、又当学舎の人々の間においても、又平日から常に御来聴下さる重立った方々を始めとして、信仰上常に聞いて居らるるところに、更に一段の驚きを立てて、或はまた自分自身の心状に省みて、色々お喜び下さる方の多いのである。故に今申す信心のごく「かなめ」の味わいを、これら実際上の味わいから、喜ばせて頂きたいと思う事であります。

二　信仰上二種の傾向

昨年「仏智不思議」の題でお話したのであります。あの講話が、多くの人に大層不審を起させ、これがもとになって信仰が起ったようであります。勿論それも其人々々の御縁に従って色々の原因があり、一概に言えぬのでありますけれども、昨年の暮れにこのことを申したのであります。

とかく信仰を喜ぶにつき、二種の傾向がある。で著しくお慈悲に気がつき、自分の浅間しき根性の底の底まで知り抜きて、しかも、その者を見捨てたまわぬ広大のお心を頂きたる人は、一旦は心の悩み全く取れ、胸中一点の滞りなく、非常にうららかに喜ばせて貰えるのであるが、その人は仏のお慈悲に打ちあかされたその喜びのあまり、いつの間にかその自分の喜びに目が着き、知らず識らず、自分は仏の恵みを頂いてしまうたと、極端に云うならば、悟ったような心持になり、「もう一切の煩悶も、罪悪も滅してしまったから」と、あたかもこの世ながら仏になったような気で喜ぶもの故、いつの間にかつい〳〵「らく」になったその自分の心持を頼みにする間違いに陥入り、あながち自分の罪のしてみようのないのを、見捨て給わざる広大の御恩を忘るるのではないが、それとはなしに、それが昔のことになってしまい、自分の「らく」になった心持ばかりを喜ぶようになるのである。するとこれは悟りの間違いに陥入ってしまうのである。青年諸君の中にこれが多いのである。能く自分は念仏を稱えるでもなしに「己はもう分った、頂

けた」というようなことになるのであります。

すると又一面には、仏のお慈悲を幼時からのべつに聞き、本願の事は、常に耳なれて居る、宗教の家庭に生れた人であるとか、或は平日、聴聞し慣れて居る同行信者の人達、さなくても青年の方でも聞き慣れて居る人達などには、いつ喜んだという事もなく「斯く悩みの止まぬ者を、お見捨てなきが広大のお慈悲である」と言うて、一向ここぞと取り押えてお見捨て無き真実の頂けておらぬ人がある。よく同行信者の人などは「御信心頂いても今も昔とちっとも変るところがない、同じである」と、お慈悲で心の夜が明け疑いが取れるというところは更に無くして「かくの如く浅間しき、悪しき心のそのままで、この者をお助け」と、このところで「けじめ」が立たず、のべつになって居る人が多いのである。するとこれでは、お慈悲でがつくり自分の心に頭がさがり、今迄人を不足に思うて居ったのは、全く自分が悪かった、とこちらの頭の折れるというところはさらにない。いつの間にか「悪うてもお助けである、浅間しくてもよいのである」と、自分でそう言っている積りではなけれども、知らず識らずの間に、おのずからここになってしまうのである。かくなると、仏智不思議が、さらに不思議でなくなってしまうのであります。

三　不思議の真意の頂けてない人

一例を申せば、旧臘もある方がお訪ね下されて「私は仏智不思議を信ぜさせて頂きました」と仰しゃるから、私は「それではどうお頂きなされたか」とお尋ねした。すると「助からぬ者をお助け下さるが、不思議である」と云わる。「それではその味わいはどうでありますか」とお尋ねすると、さあそこになるともう分からぬのである、「助けて下さるというは、極楽に行くことか」などと云うようなことになり、この浅間しき者を真にお見捨て下さらぬそこの味わいは更に頂けて居ないのであります。でこの種の人の喜ばるる「浅間しき者を仏はお助け」は、前の悟りに陥入る人とは異なりて、遣る瀬なきお慈悲に打ちあかさるるというところは更になくして、その上に我と我が手をあげ、稱名相続するようになるのでありますけれども、今のわが心に真に遣る瀬なきお恵みを頂いて、お慈悲に夜が明けたという処が少しも無い。常に云う如く、仏のお慈悲と我々の悪しさとが、出逢いになっているのである。「我々は悪いけれども、仏はこの者をお見捨てないのである」と、この処で我が身の悪しさが手放しになって、喜ばせて貰うという処が、更に出ていないのである。これでは真にお慈悲が頂けたにはならぬのであります。そうではなく、此方は真に悪しきその者が、広大のお慈悲でその悪の大もとが滅され、頭が下がるという処がなくてはならぬのである。

で、この類の喜び方をして居らるる人の不思議は、不思議がただ言葉だけになって居る。「助からぬ者を助けて下さるが不思議である」とか、或は「仏智不思議を信ずる」とか言うて居ながら、その不思議の真の味わいが、さらに分かっていないのであります。さてかくまで言うと、これらの人も不審が立つのでありますけれども、一般には不思議不思議と云い流して、その不思議の肝腎な処は何処であるとまでは云わぬのである。

昨年末の講話にも申したのでありますが、真宗の肝腎はこの不思議が分かると分からざるとにある。いよいよ真宗の御正意がいただけると、いただけぬは、この不思議が分かると分からざるとで決まるのであります。ところが今の聞き慣れて居らるる人々は、他力においては不思議があたりまえと思うて居らるるもの故、不思議不思議と聞いてもさらに驚きを立てぬ。それらの人々の思うて居らるる不思議は、不思議不思議と押えつけた、不思議の丸飲みである。ここが先達て来みなさんの驚きを立てられた処なのであります。

四　不思議の味わい

そこで順序を踏まなければならぬ故、ここで不思議の味わいを申します。不思議とは何か、不思議とは思いがけないことが不思議である。我々が向うに行くと彼の人に遇われるからと、行きて遇うたのなら、不思議でも何でもない。ところが到底遇われまいと思うて居った処が、計らずも尋ねている人が、向うから来た時は、これは実に思いがけないのである。これは実に不思議じゃと、この思いがけない事に出会った時に出る言葉であります。

ところで、今の真宗の教えを聞き慣れて居る者は、この不思議の意味を甚だ悪しく、俗に奇妙という程の意味にとり、助からぬ者を助けて下さるは、不思議じゃ、奇妙じゃというように云うているから、いつまでも不思議の真意が分からぬのである。

我々がこのお慈悲の上で不思議というは、実に思いがけもなく、このたび大悲の親に遇うたのであるから、実に不思議なのであります。それではそんなに驚かねばならぬ程までにそれが不思議であるのはどうかと云うに、ここはお慈悲の上の言葉でいうと、我々は本願慣れ、御教化慣れがしている故に、そういう慣れのせぬように、世間の上で分かり易く申します。我々は日常の日暮しにおいて「悪しきことをしてはならぬ、善き事をせねばならぬ、善い事をすれば人は賞める。悪をすれば人は憎む。たとい人がどれだけ賞めようと、悪いことをすれば自分で気持が悪いし、又人がどれ程悪しく云うとも、善いことは何処までも善いのである」という考えで、日常の日暮らしをしているのである。

ところが、実際その通り、善いことが出来、悪いことが

避けられるならば、事はないのでありますけれども、実際においては我々は、自分で決めたとの善し悪しでさえ、思うように実行が出来ぬ。いわんや、その善し悪しが、我々の自分の都合で、自分によいことを善しとし、自分にあしきことを悪しと決めたもので、善いというのも、こうすれば自分のために善いという処から善しとし、自分に悪いことを悪と決めたのであって、善いというのも、悪しというのも自分本位に決めているのである。第一にこれからしてが、甚だあてにならぬのである。

処で仏のお慈悲とはどうかというに、ここで意外千万なことが起ってくるのである。それを今更の如く私はここでお話する。それは今更のごとく皆様にも聞いて頂きたいからである。実に思えば思うほど意外なことが、ここに起ってくるのであります。

五　意外なる西岸上の喚び声

さてそれは何か、初めからお話するならば、かく我々は善き心は起らず、悪しき思いは止まず、実に自分如きしょうのない者はないと、自分の方から遠慮し、隔ててかかれば、人もこちらを隔て、うとんじるに至る、実にして見ようのないのが我々の有様である。ここにおいて、人の事はとにかく、自分さえ隔てぬようにすればよいと、何程思うても、我々はその隔て根性がどうしても止まぬ。自分程悪い者がないと云うては人を隔て、向うが悪いと云うては相手を隔て、甲にも乙にも隔て根性がどうしても止まぬのである。それでは自分ながら善いと思うているかというに、その癖わるいと思うている。

自覚の上からそう思うているのではないが、そのため涙を流し、泣いて悲しんで居るのである。かくこれ程までに止めたい〳〵と思うのにどうしても悪しき根性が止められぬ世の中に、思いもかけず一人の人あって言わるるには、イヤ〳〵そうでない。我は君の隠している心中を、皆知っている。君の云う悪いは、成る程悪い、我は決して善いとは云わぬ。併しながら我は、君の如く、君が悪いと云うて、君を斥ける事はせぬぞ、君が悪しきために、君を捨てることはせぬ。君は君自身で自分が悪いと云って、自分の心を隔てているのであるが、それは汝がまだ我が友情を知らぬからであるぞ。我とて君が有様を見て、決して善いと云うのではない。如何にも悪しき浅間しき君であるが、その浅間しき君を飽くまで捨てねばかりでなく、どうか早くこのわが心をとどけて、君の苦しみを抜いてやりたいと、わざわざここまで出かけて来た我である。我はそれ程までに君を思うの故、この我が心が君に知れたら、いらざる苦労は早く止めて、どうか我が心を能く味わって呉れ、と、こちらは人を疑い隔て、自分の悪しきために、身も引き裂かれるばかりの苦痛をしているのに、はからずもその者に向わせられて

西岸上に人有って喚ぼうて言わく、汝一心正念にして直に来れ、我能く汝を護らん、すべて水火の難に堕せんことを恐れざれ。

との広大の呼び声なのであります。

六　やるせなき大悲のお心

ここで云わねばならぬのは、常に云う如く「能く」の一字である。能くとは、その私の悪しき心のありっだけをよく〳〵ご承知の上で、その悪しきが止まぬが哀れと、その広大な同情のお力で、遂に私の心配の根本を融かしおおせるまで、飽くまで哀れんで下さるが「能く」である。で、「我能く汝を護らん。すべて水火の難に堕せんことを恐れざれ」と、「汝は貪欲の波逆立ち、瞋恚の炎燃え、そのため昼夜苦しんでいるのであるが、それを恐れるな、気づかうな」とは何故であるか。「たとい如何なる猛火来るとも滅ぶることなき汝のその貪欲瞋恚の心に向って、我は、それを可哀想に思い、こちらよりは貪欲瞋恚を離れた広大の心を以て、常にその者に向っているのであるぞ」と、ここが実に肝腎なのであります。私は常に人に向って貪欲瞋恚の心を起している。それを仏は横合いから救い取って下さる、というのではない。私の貪欲瞋恚のひどいため、慈悲ある人もすでに皆手を納めてしまった我々である。その一旦出されたる手を引っ込めさせてしまう、これほどまでに我々は悪いのである。然るにかかる我々を、仏は皆知り抜いて、その者が実に哀れだと、自分の一身を投げ出してその者に向うて下さる広大のお慈悲なれば、このお心の頂かれた一念には、ここでころりと此方の貪欲瞋恚を仏のお慈悲に取られてしまう処があるのである。この取られた味わいが、一念には無くてはならぬのであります。してその取られる味わいは、心中になる程有難いと頂いた一念、自分で取ろうと思うて取れるのでなく「不断煩悩得涅槃」と、もはやそれらの罪咎が何等の心配にもならなくなってしまうのである。故に蓮如上人の『御文』のお示しに言わく

されば無始よりこのかた造りと造る悪業煩悩を、のこるところもなく願力不思議をもって消滅するいわれあるが故に、正定聚不退のくらいに住すとなり。云々

又親鸞聖人は、転悪成善とお示し下されてある。又『唯信鈔文意』にはこの転の意味をお知らせ下されて

転ずというは、つみをけしうしなわずして、善になすなり。よろずのみず大海にいりぬれば、すなわちうしおとなるがごとし。

とのお言葉もあるのであります。即ち今日まで心に人を憎み隔てている我々が、その飽くまで私を憎まず隔てぬ広大

のお心に遇う時は、今まで隔て憎んで居たのは実に悪しかった。申訳なかったと、その隔て給わぬ遣る瀬なきご親切のために、こちらの頭が下り、「あゝよくも〳〵この浅間しく、このして見ようのない根性では、最早、一寸も動けぬと思うていた世の中に、その根性の悪いのが可哀想である、その隔てのやまぬのが哀れであると、それ程までのお心とは、実に〳〵恐れ入りましたと、その如何にもお慈悲の深いため、如何な私の疑い隔ての根性も最早やきかなくなり、実に何とも申し訳ないとなるのである。でこのお慈悲を頂いた上より云う時は、このして見ようの無い私のために、かほどまでに遣る瀬なく思召し下さるお慈悲が実に不思議である。蓮如上人が、この悪凡夫が仏になるが不思議と仰せられたその不思議は、これ程までに悪い者を、それ程までに言うて下さるお心は如何にもお不思議であるとの仰せなのであります。

で著しく言う時は、何も本願という大きな事ばかり頂くのでない。我々がこの行き詰っている心中に、たとい針の先で突いた程でもそのお心が頂けると、それからずるずると、その広大なお心が頂かせて貰えるのである。たとい針の先で突いた程でも、このして見よう無い〳〵と泣いて居る者を、それを捨てぬお慈悲とは不思議じゃと頂くとすると、その一点気づかせて貰ったお心は、実に私の八万四千の煩悩を残らずしろしめし、それが一々哀れだと、遣る瀬なき大悲の思召しより、飽くまでその者を照らして、見捨てたまわぬ広大のお心である。ここになると、最早ことばで言うて見ようがない。それ程までに浅間しき私を、それ程の広大な哀れみとは、実に能くも〳〵と、あやまりはて、お慈悲を喜ぶほかなくなるのである。

七　道徳と信仰と矛盾する間は

で私など頂いたのは十七年前の事でありますが、それまでの長い間の私の道徳観念は、善き事はよい、悪い事はわるい、故に出来るだけ善くしなければならぬ、というのであった。しかもそう云いながらお慈悲の方は「悪くてもよいのである。」と、まるで矛盾した事を言うて居ったのである。「日々の生活は、悪くてはいかぬ、出来るだけ善くしなければならぬ」と云いつつ、仏のお慈悲の方は「悪しくてもよい」というの故、これでは仏のお慈悲の方から云えば道徳は砕けてしまい、道徳を立てればお慈悲の方は砕けてしまう。この矛盾を心中に置きながら、しかもそっと胸撫でおろし「しかし出来るだけは善くしなくてはならぬ」と、実におかしな状態で、しかもこれで頂けた積りで長らくおったのであります。併しこれではどれだけ悪しくてもよいのであると押えて見ても、本当に満足されず、それかと云って「善くしなければならぬ」は、我々の悪の根性が強い

もの故、そのために負けてしまうて、いっまでたっても本ものにならぬ。『歎異抄』に、

くちには願力をたのみたてまつるといいて、こころにはさこそ悪人をたすけんという願不思議にましますというとも、さすがよからんものをこそ、たすけたまわんずれとおもうほどに、願力をうたがい、他力をたのみまいらするこころかけて、云々。

と、みんなが、信仰上最も苦心するところ――又「なる程悪人を助けて下さるお慈悲には相違ないが、もつと喜べるようでなくては」など言うて、出られぬ処はここなのであります。

八　我等の隔て根性

処が私がお慈悲に気づかせて貰うた一念は、今まで出来るだけ善くしなければならぬなど思うて居ったのは、もってのほかの間違いであった。自分はこの通り、長い間人を隔て、疑い、善い事どころか、実に申し訳けなき者であったのである。この者を人が見たら、いかにも許し、愛する者は無いはずである。この悪い奴故、人が悪いと見るのが、むしろ当然なのである。

然るに今「この悪い者を、その悪いのが哀われと見捨てて下さらぬお慈悲とは」と、――ここで仏は悪い者をよいと言って下さるのではない。悪い私の根性の有り切りを、仏はみな知り抜いて下されて、その上でその悪い私を「悪くても悪いと思わぬ、悪くてもよい」というて下さるのでは、こちらの悪い根性が天下晴れて通れる故、それではこちらの心の折れるというところがない。しからば善く出来るかというに、善く出来ぬ。――で、常に言うのでありますが、自分の家庭内で疑う者は、世間に出ても争う者である。我々は、家庭内で争う者は、世間に出ても争う者である。我々は、人と疑い隔たるもとは相手にあると思うているけれど、相手が悪しくするからこちらが隔てるのでない、人に触れると人を斬り、馬に触れると馬を斬るという具合に、家庭内で悪しき性分が出、道を歩いては道行く人を疑い、電車に乗れば、乗合った人に邪推の根性をもって向う我々なのである。で隔てる「もと」は自分の心にある。処が誰でもお慈悲に向う時は「自分は人には隔て悪しくしているが、仏にはして居らぬ」と思っており、而も、仏はその人間同志互に相隔てて居る者を救うて下さるのであると思うているが、いよ〳〵真に自分は仏を隔てて居ないかどうか、「人には隔てて居るが、仏には隔てて居ない」と思うているのは、自分でそう決めこんで居るまでのことで、子供が「自分は道楽して居るが、親だけはこの者を捨てて下さらぬ」と、親がそのために日夜、夜もぬむらず心配して下さるそのお心を頂かずに、自分の独り決めてそう思うていると同

じである。即ちそう云うている心が、実に遣る瀬なき親の心配を受けつけず、隔てておる心である。でそのような喜びは、何か煩悩事が起ってくると、勿ち有難くなくなり、一辺に喜びが失せてしまう。しかもそうした程その喜びで周囲を隔てながら念仏稱え、仏はこの者を向うより救うて下さるお慈悲であると云うて居るのであります。

九　「げにほこられ候え」

ここに一人の人があって「君の心や君の性分はみな知っている。君の現在思うているくらいのことは、聞かぬでも皆知っている。君は人ばかり隔てていると思うているけれども、人ばかりでない、我に向っても隔てているのである。我がこれまで云っても、中々一応二応で君は信ぜられまい。然し君がいくら隔ててもそのために君に対する我が心はびくとも動かぬぞ。君は万事先き廻りする性分故、君が我に対してどう思うて居るかは、疾くから分っている」と、こちらが知らぬと思うている事まで、向うが恐るべき程知り抜いて、こちらの最も苦にしている処を先手をもって押えられると、こちらはびっくりして縮みあがってしまう。そこに向うの遣る瀬なき仰せを頂いて「かくの如くこちらは、隔て、申し訳なきこの者を、隔て給わぬ大悲の有難や」と、頂けばよいのであるが、ややもすればここで「如何にも有難いお心であるけれども、余りに悪い奴故恐れ多い」と気兼心を出し、あまりにお慈悲の思いかげないために、こちらが遠慮して引き下ってしまう。私が煩悶した時に、親が「自分は年を取っている。汝の苦しみに代れるものなら代ってやりたい」と言うて下されたのは如何にも有難いけれども「それ程までに親に心配かけて、実に済まぬ」とこちらが引き下ってしまう故、折角の有難い親のお心が頂けぬ。向うの言うて下さるお言葉を充分に聞かずに、こちらが引き下ってしまうから、切角の親の苦労が水泡に帰してしまう。

でここになると向うのご苦労も一応二応でない。向うはこの者にどう云って下さるかというに「汝に与えるためにこさえた財産故、汝が遠慮すると折角苦心した所詮がなくなってしまう。汝は唯口先きだけて有難い〳〵と言うているが、それでは唯挨拶だけである。こちのやろうという肝腎の金を受取って満足してくれなければ、如何程禮を云うてくれてもしようがないではないか」と、――で『歎異抄』の御教化には

本願にほこるこころのあらんにつけてこそ、他力をたのむ信心も決定しぬべきことにて候え。

実にひどいお言葉である。又

持戒持律にてのみ本願を信ずべくば、われらいかでか生死をはなるべきや。かかるあさましき身も本願にあいたてまつりてこそ、げにほこられ候え。

実に「かかるして見ようのない貪乏人も、かかる慈悲ある人に遇い奉りたればこそほこられ候え」である。私など長い間、この「ほこる」の味わいが分らなんだ。「ほこる」とは「悪くてもよい」と思うことかも知れぬなど思うていた。処が「ほこる」は向うのお慈悲の深きに打明かされ、こちらの心配がらくになることであったのである。ここになると、実に大悲の光明に打ちほだされ、大船に乗って、広海に浮んだ心持である。故に『行巻』には、

大悲の願船に乗じて、光明の広海に浮みぬれば、至徳の風静に、衆禍の波転ず。即ち無明の闇を破し、速に無量光明土に到り、大般涅槃を証し、普賢の徳に遵うなり。

遣る瀬なき広大のお慈悲に打明かされ「実に私が悪う御座いました」と、ここはお慈悲に甘えるではなけれども、お慈悲の深きため、いつの間にか、自分の心配が消え、遣る瀬なき大悲全身に満ち、暗き心の夜があけるのである。するとかくまでお慈悲の深きも不思議、またそのお慈悲で心の暗みのとれたも不思議なれば、それで私の腹のふくれたも不思議である。向うの広大の思召しも不思議なれば、それ頂いたこちらの心持も不思議である。今まであてにならぬ〳〵と思うて居た境遇は方角が一転し、今まで隔っ隔てぬ、憎む憎まぬと云うて居った外界までが一変してしまう。

念仏者は無碍の一道なり。そのいわれいかんとなれば、信心の行者には天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することなし、罪悪も業報を感することあたわず、諸善もおよぶことなきゆえに、無碍の一道なり。

と頂くが不思議である。以上が仏智不思議の頂けた味わいなのであります。　（大正二年六月　求道誌）

――○――○――○――○――○――○――

耳だけ借しておくれ　池山　榮吉

秋に落ちた種子は冬の間どこにあるか知れないが、春の光と潤いにあうと芽を出し花を咲かせるように真実の言葉は耳から目から心の田に蒔いておくと、たとえ長い間忘れていても、機縁が到来すると必ず思い出されて、大きな力となり、光とあらわれてくる、空しくなることはない。

歎異抄の言葉も、とにかく耳にだけ入れておれば、いっかは、大いにうなづける時が来る、だから今どう思っていてもよい、耳だけ借しておくれ。

学問と信仰

福島政雄

学問が徹底すれば信仰の境地が開けるものである。然るに学問と信仰とが相衝突するが如くに考えるのは、西洋伝来の偏見である。学問は知識を拡むるものと考え、信仰は愚痴無智の者が求むるものであるとする偏見が世に行われている。故に少しく学問がわかったと自ら考える者は、自己を愚夫愚婦と同列に置きたくないという傲慢心を起す。愚夫愚婦に聞かせるような説教は聴きたくないというのは、所謂知識階級の誇り言である。自分は愚夫愚婦という者の中には入らない、よほど高尚なる人間であるという自負心を持って居るのである。

併しその愚夫愚婦とは何であるか。何人が愚夫愚婦であり、何人が愚夫愚婦でないのか。この疑問を提出するとき私はその分界がわからなくなる。所謂学校教育を受けない人々が愚夫愚婦であろうか。否々私は学校教育を受けない人、無知識の人々の裡に尊敬すべき多くの人を発見する。而してなまじ半可通の学問知識を有するが為に賢げなる判断を振りまわして、最も驚くべき迷信や似而非宗教に陥って居る人が数多くあることを発見する。故に私は中途半端の知識は迷信の友であると考えている。

学問知識は、それが真実の学問知識である限りにおいては、必ず自己の能力知識の限界に眼ざめなければならぬ。学問は深くなれば深くなるほどわからぬことが深くなる。文科の学問でも、理科の学問でも、この点においてはかわりはない。真実の学者は自己の知識の有限なることに目ざめて居るものである。ただ学問の初歩にある者のみが、自己の知識はすべての解決をするかの如くに妄想するのである。百位や千位の算術の計算を学んでいる小学児童は、自己の知識が日々増大することを感ずるが、ニュートン以後今日に至るまでの数理の発展に没頭して、更に一歩を進めようとしている大数学者は、その研鑽の一歩々々に無限の暗黒の深淵を見る。故に徹底せる学問的態度は、やがて真実の宗教への縁となるものである。

信仰は自己の如実相に目ざめるところから開ける。その目ざめの第一歩は、自己の不完全や自己の缺陥に目ざめることである。真剣に学問をすれば自己の不完全や缺陥には直に気づくものである。併し学問に真剣なるが故に、学問に執着して手を放すことが出来ないということでは信仰の世界は開けない。世の中には科学や哲学の説明によって基礎を明かにした宗教であるが故に、真実の宗教であるなどと言って或る宗教をありがたがって居る人がある。これは科学や哲学から手を放しきれぬ人であって、そのありがたがる宗教なるものは実は怪しいものである。或は道徳的宗教であるが故にありがたいと言って居る人がある。これは又道徳から手を放しきれぬ人である。もとより科学や哲学や道徳は、それぞれの方面において人生必須のものである。併し宗教の世界は、科学や哲学や道徳の世界から派生した世界ではない。科学から行っても哲学から行っても道徳から行っても、絶対絶命に行きつまるところにおいて開ける大死一番の世界である。大死一番であるからすべてのものから手を放すのである。科学や哲学や道徳にしがみついて行なうとする根性を打ちくだくのである。それは科学や哲学や道徳が悪いというのではなく、しがみついて行こうという根性が劣等であるというのである。この根性が劣等であるということに気がつけば手を放さざるを得ないのである。而して手を放すと同時に、人生のことはすべて有限の所依であるにすぎぬということがわかって来るのである。

学問は有限の所依であって、決して無限の帰依所ではない。学問して自己の如実相に目ざめ、自己の缺陥に気がつき、否々更に進んで自己が煩悩の一肉塊にすぎないことに目がさめ来るとき、而して学問に対する執着の手も離れて来るとき、人間としての私が求むるところはただ無限の帰依所のみである。無限の帰依所とは自己の生命の全分をその前に放下して、私が独立独行し得る所以の久遠の親の誠の生命である。人生のすべてのものから手を放さなければならぬようになって始めて久遠の親のまことがわかるものである。一切から棄てらるる無価値劣等なる者を、その劣等なるが故に悲愍して棄てずという久遠のいのちが、私の生命に通って私を支えて居るということは、私が一切から手を放すときに最もしみじみと感ぜられることである。そこに久遠の帰依がある。私は久遠の慈悲のいのちに帰依するのである。

然らば学問はどうなるのであるか。学問から手を放すというは学問を捨てるのである。「何の学問か往生の要なるべきや」である。併しかようになれば学問を生命とする者の生活はどうなるのであるか。捨てるこは何であるか学問をしなくなることであるか。否々捨てるとは捨の心を以て

学問に対することである。捨の心とは苦、楽、捨の三心を区別する捨の心であって、苦にあらず楽にあらざる平静の心をもって学問を続けて行く。ここにいたれば学問は一定限界の内において我が人生の所依となり、而して無限界において、我が生命の帰依所が何処にあるかの方向を指示する羅針盤となる。「いかにも〳〵学問して本願の旨を知るべきなり」の聖語は、ここに深い意味を持つこととなるのである。

学問は信仰の敵ではない。併し必ずしも信仰の味方でもない。学問の世界と信仰の世界とは同一平面上にある世界ではない。併し二つの世界はどこかで相接して居る。自然科学であるからその世界は信仰の世界に接しないとは言えない。否自然科学者には往々にして最も敬虔なる信仰の人がある。而して精神科学者とか宗教学者とか稱せらるる人人に、存外に無信仰にして、敬虔の心無き人が多いものである。蓋し精神科学者などというものは、その学問が不徹底に陥り易いからである。

学問して徹底すれば「本願のむね」に触れるという。それは久遠の親心の胸に摂取せられて、常に悠々として無理のない、自家本然のいのちにかえることであるともいうことが出来よう。それはふるさとにかえることである。学問の道は我が心魂の故郷へかえる縁となるものである。学問の自由ということもそこに味わわれるとおもう。自由とは勝手気儘を行うことではない。おのずから由るところがあるを自由という。その由るところは久遠の親心である。この自由がなければ、学問は煩悩のたねであり、名誉利益の手段であるにすぎない。学問すればするほど人我の隔てが深く、学者になればなるほど他と相和することが出来ないという者も世の中には多い。似而非学問の人生を毒するもの比比として然りである。ただ学問すればするほどいよいよ絶対無限の味を知り、自己の生命が愚夫愚婦のすがたであることを感じ、一切の人々と共に手を携えて、無限に真実の道を求めて行かうという心になる。かようの人のいのちにおいて、学問と信仰とは融合して一味のものとなるのである。

（昭和十一、十二、七、夜稿）

凡骨日誌抄（九）

——帰命無量寿如来——

西　元　宗　助

九月十五日、親族にお芽出たいことがあって上京したのを幸い、千鳥ケ渕・戦没者墓苑にお詣りして、漸く宿願をはたすことが出来た。

その場所は皇居の傍の千鳥ケ渕に面していて、まことに宜しいが、敷地が予想以上に狭く（靖国神社の境内は多分、この十倍）、すぐ傍を自動車の疾駆する騒音の聞こえるのが残念。それにこのたびの大戦の戦没者の方々二百万余を象徴する六角堂の御本屋も、簡素といえば聞こえはよいが、実際はお粗末すぎて、これでは戦没者にたいし、その御遺族に対して申訳がない。しかも所管は内閣総理府ではなく環境庁であるという。

このようにあるからであろう。この日、お詣りしている者は、わたし以外には、なんとたった二人。靖国神社はこの日、老人の日の休日であった故でもあろう、陸続として群参し、無慮何千余であったという。

ともあれ、白菊を捧げて、我建超世願と重誓偈を誦してまつる。かなしく慚愧の念、ふつふつとする。さすがに清掃された帰えり道には、はや彼岸花が二、三咲いていた。

○

お彼岸の中日、家内と共に西大谷にお詣りする。鳥辺山への路には売店が列び、参詣する人々で賑やか。じつは西大谷のわが家の小墓地に、いよいよお墓を建てることについて、墓石屋さんと下相談することも目的の一つであった。

郷里の鹿児島市草牟田の市営墓地には、明治の末に市内の旧墓地から移つされた我が家の墓地がある。そこには徳川時代の初期近くまでさかのぼることの出来る先祖のお墓が二十数基残っていて、その中には祀堂型や板碑型の珍しいお墓や石仏もある。しかしわが家は、わたしの代で、一応終えることになる。養子のことを問われたこともあるが、わたしたちにはその考えはない。すべては南無阿弥陀仏——仏の家に還えっていく。この夏、郷里に帰えって墓参したときに、この感—この覚悟を切実にしたのである。

もともと鹿児島は、沖縄ほどではないにしても墓を大切にするところで、それというのも墓には祖霊が宿ると信じられ、お盆やお彼岸には供花と線香の絶えぬところである。しかし、その多くは祖霊信仰にとどまって、必ずしも仏教信仰とはいいがたいうらみもある。

それはそれとして、郷里の墓地はこのままにして、—友人の郷土史家によると、西元家の墓は町家としては最も古いものの一つとのことでもあるので—私ども夫婦の生きているうちは出来るだけのことはすることとして、さきのことは、—たとえ無縁墓地になろうと—それこそ鹿児島市におまかせするほかはないと、諦念したことであった。

さてそれで、ひそかに問題となりましたのが、ことし十三回忌を迎える一人息子の釈信澄のこと。その遺骨は実は今もなお、わが家のお仏壇の背後にある。それから私たち夫婦の将来の遺骨のことも。

今まで、このことにふれようとすると、家のものは妙に嫌がる。それは鹿児島にお墓があるではないかという。それは一応もっともであるけれど、娘たち、じっさいは鹿児島にこの十年余行っていない。殊に結婚してからはそれどころではない。そうなることは判りきっていたので、先年、同郷の敬愛する川畑愛義先輩から、西大谷の川畑家のお墓の近くに一基あいているとの報せがあったとき、わたしは幸いと飛びついて本廟事務所に借地の手続きをとっておいたのである。しかし、この墓地に家の者を連れていったときは、そのころは息子の亡くなった翌年のころであったためもあって、こんな淋しいところに埋葬するなんて反対というので、そのままにしておいた。

しかしそれから十年余たった。娘たちはそれぞれ自分の家をもった。こうなると事情は一変する。しかも私たちもいわゆる高齢となって時機が熟し、かくてお墓の建設となったのである。

さて、どのようなお墓にするか。そのためもあって、西大谷の墓地をあちこちと歩いてみた。さすがに勧学さんたちのお墓は荘重であり、しかも簡素であってよい。花立ても飾りもない。ただ院号と法名が刻してあるだけである。しかし多くのお墓は、殊に戦後の新しいお墓ほど、○○家の墓というのが多い。倶会一処、又は、南無阿弥陀仏と、心ゆかしく表面に刻んだお墓もあるにはあるが、意外に乏しい。わたしの家の墓地、それは西大谷墓地のいちばん東の隅で、21区といい、近くに無縁の墓地があり海外引揚者の墓地のあるところであるが、ここは近ごろはやりの建売住宅群と同じで、小区割にズラリとぎっしり○○家墓が列んでいる。

これには、私ども夫婦考えこんでしまった。まず頭に閃

めいたこと、自然石のお墓に出来ないものか、どうか。そして表に刻む文字は、どうしてもお名号又はそれに類する文字でなければならぬと。しかし、あとで石屋と話しあってみて判ったこと、それは自然石というのが意外に困難で、じじつ西大谷には自然石のお墓の殆んど見あたらぬことであった。それに建設を急ぐ。そんなことで墓石のことは一般の墓型にしたがい、本願寺出入りの石屋さんに任せるほかないことに落着いた。

さて問題は、墓の表の文字である。西大谷の墓地を歩き廻っていて、これはよいと思ったのに、親鸞聖人の真蹟を模した六字名号碑があった。これは同朋舎の今田家のお墓であって、さすがと感じいって合掌したことであった。それでわが家も、聖人の名号碑にと思わないでもなかった。しかし真似をあまり好かぬ私は、いっそのこと足利浄円先生又は金子大栄先生の名号碑をと、あれこれと二、三日思案したことである。しかし、いずれにしてもそうするとなると、一応写真に撮ってそれを石屋さんに渡さねばならない。案外多忙な私には面倒でもある。

こうして、あれこれ迷っているとき、こうなれば、いっそのこと、この自分が書かせていただいたらどうか、と、閃くように私は決意した。まず家内に宣言する。オイ、僕が書くぞ、いや、書かしていただくぞと、おごそかに宣言すると、その気魄におそれいったのか、家内は即坐に、それはまことによいことに気がつかれました。是非そうなさい、という。これには少し拍子抜けであった。かねがね家内は、それでも遠慮がちに、あなた、他人さまから、どんなに頼まれても、まちがっても字だけはお書きにならぬようにと、それこそ情気なさそうに忠告してくれていた。その家内が心から賛成してくれたのである。勇気百倍。

それである日、秘蔵の端溪の硯石に、とっておきの古墨をつかい、筆は広島の神技堂作の中筆を手にした。この筆はロサンゼルスの清水稔老夫人（九十歳）から先年贈られたもので、西元愛用と刻まれてあるもの。さて文字は、正信偈の初句の帰命無量寿如来と決めた。この御文字は西大谷墓地のどこにも見当らぬように思えたから。しかも私の最も感銘するお言葉であるから。

よって神も仏も照覧あれと、二尺の長さの奉書紙に、一気にさっと筆をはしらせた。自分の拙い字ながら、ともかく書いたのである。それで書斉から階下の茶の間にかけ降りて、これを襖に掲げて、それでも多少、おそるおそる家内に、どうかなァというと、家内「無邪気に書けていて、たいへんよい」という。娘もやってきて「よい」という。それに「ともかく言葉が素晴らしい」といってくれる。

無量寿—かぎりなき命に帰命する、これは素晴らしいと。

わたしも眺めながら、ウン、これはよく書けているというと、家内は微笑する。なお墓石の裏には西元家とし、左面には釈信澄と刻み、右面には将来のわれらの法名等を書けるよう空白にすることにして、これで一件落着となりました。

ついでながら法名と申せば、わたしには既に法名の与えられていることを何十年か振りに昨晩、想い起しました。それはいつのころであろうか、わたしの幼年期か。母方（海江田）の祖父が、御本山に参った折、孫である私の法名をいただいてこられたとのことで、あるとき、母がお仏壇の引出から、奉書紙に釈宗珠と認めたものを取り出して私に示したことがありました。尤もその紙片は今はなくしてしまっておりますが。

この祖父は、私の幼いころに亡くなったようで、残念ながら私の記憶にはありませんが、貴族院議員もした爺さんで、この海江田家の土蔵の二階には、かくれ念仏時代の和綴の仏書が沢山あったことを想出す。終戦後、シベリアから帰国して、鹿児島に赴き、日置郡市来町の海江田家を訪れたところ、それらのものが悉く処分され、金庫六つあった土蔵も既に人手に渡ったあとで、今もまことに残念なことをしたと思うことである。わたしごとを、ながながと誌しました。ごめんください。

合掌

伝道板

渡辺了恵

ぼさつさま

ぼさつさま
ろうそくみたいだ
身をへらし
まわりを
あかるく
してござる

人間というもの

井上善右ヱ門

この私はなぜ法を聞くようになったのでしょう。ある時ある目的を立てて聞きはじめたのではありません。何時とはなしに聞かざるを得ない方向に、私の心が動かされてきたという外ないように思います。勿論よき師に遇うたことは画期的な出来事でありましたが、今にして思うと自分に気づかぬままに何かを求めていたようです。それがよき師に遇うことによって点火され、意識的になったと思います。

なぜに宗教というものが人間にあるのかという問題も、こうしたところに帰因しているように思います。人間として私が今ここに生きているということは疑いない事実です。ところがその間という私は、幼い時は全く何の思いもなく生きていたのです。それがある年令に達した頃から、何かを求めて生きるような生き方になってきました。しかしそれは暗中模索といった状態で、何かを求めているのですが、それが何やらわからないのです。わからぬままに生きているということは、極めて不安定な心もとない生き方です。それと同時に、求めていて満たされないという空虚をいだいた生き方であります。その次の思出に、雲にでも乗っているようなおぼつかなさと頼りなさを心々と、感じたことが今も記憶に残っています。

その何かを求めているということが、だん〳〵意識的になって来た頃「何のために……」という疑問がいろ〳〵な事に付き纏って困りました。最近ある本を読んでそうした気持がなか〳〵上手に叙述してあるなと感じました。それは次のようです。

妙な級友があって、そばへ来ては何のためときく、たとえば弁当を食べていると「君、食事をするのは何のため」と問う、「栄養を取って丈夫になるため」と答えると、「丈夫になるのは何のため」と質問する。「大きくなって働く

ため」と答えると、「働くのは何のため」とつづける。この問答を追ってみると、「働くのはお金をうるため」、「お金をうるのは何のため」…「家を建てて暮すため」、「暮すのは何のため」…「それは生きるためだ」というと「生きるのは何のため」となる。ここに至って問われた方は窮してしまう…と。

こんな問答をした経験は私にはありませんが、漠然と「何のため」という疑問がつき纏って暗澹としていた頃の状態を具体的に示すと、まさしくいま記するような次第となりましょう。「何のため」という疑問はいろ〳〵なところから始まりましょうが、結局すべてが、「生きるは何のため」というところに帰着します。ここに人間というものの不思議な特性があるのでありませんか。いや「生れたから生きているだけだ」とうそぶく人もありましょう。けれどそれは決してその人の本音とは言いえないと思います。人間であるかぎり「何のために生きているか」という問いはきっと胸に響く、胸に響くということは、その人も無意識に心の底でそれを求めているからだと言わねばなりません。

人間は直接には、その時〳〵のいろ〳〵な欲望を目的として生きているのが実状ですが、その最も奥底には、生が生自体の意味と意義とを問い、それを明らかにして全うしたいという切なる願いをもつているのが、人間というものの、いのちだと思います。ですから直接の欲望を満しても本当の満足はおとづれません。殊に享楽というような生き方になると、やがては飽きがきて、結局つまらないという気分に襲われる。それは人間にとって極めて淋しい事だといわねばなりません。

人間のいのちは、そのいのちの本源の姿（ありかた）に帰ろうとしているのではありませんか。それは即ち言葉を換えると、究極のいのちのありかた（真実者）から招き喚びつづけられているのが人間であると言ってよいでしょう。生死が大きな問題として感じられるのも、小さな自己に執われることから起る煩悩や罪悪の意識も、もとをただせば究極のいのちのまことから離れることのできない心に、喚起されてくる警戒と自誡の感情ということが出来るでありましょう。

こうした究極の真実のいのちと私との関係は抽象的な思索や、一般的な愛の感情によっては完全に実現され尽くすことは出来ません。ここに真実の具体的な宗教体験に、どうしても人間は帰向せざるをえない必然性があると思うの

です。親鸞聖人の体験の跡を辿ることによって、私どももまた聖人が値遇された無量寿無量光の絶対真実に出遇う道が開かれてきます。「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」とは、まさにその事、その事実を語る言葉です。

このとき始めて「人間に生るること大きなるよろこびなり」と源信僧都が叫ばれたいのちのほとばしりを、この身の上に証させていただくことが出来るのではありませんか。我々の身体的生命は刻々に移り変っています。いのちのふるさとたる無量寿無量光に遇うことなく、流転の中に消えていってどうしてよいものでしょうか。この今生にこそ心ゆくまで畢竟依に安住させていただかなければなりません。まさしくそのために生れてきたのです。

本年は浅原才市翁の五十年忌との事です。あの高らかな詩の響きが、私どもの胸に人間とは何か、宗教の真実とは何かを、しかと知らしてくれる思いがします。

わしのよろこび虚空のごとく世界のごとく
こくうせかいもなむあみだぶつ
ここにわたしをすまいをさせて
くださる慈悲がなむあみだぶつ

伝道板　渡辺了恵

無明

年とって
弱るかと思ったら
弱らぬものが
一つある

困惑

わたしの云ふこと
聞かぬ奴
八万四千も
居りまする

驕慢・敝・懈怠

今満員で
ほとけさま
御招きする場も
ありませぬ

インドの階級差別の現況

花田正夫

去る九月の仏教タイムス紙で差別問題を大きく取扱っていた。特に印度の四階級（バラモン・士族・平民・奴隷）と、それからも疎外された不可触民について述べている。

印度独立の父と称えられたマハトマ・ガンジー翁がこの身分差別問題を真剣に考え、差別するヒンズーこそ〝罪の子〟という信念から、不可触民を〝神の子〟ハリジャンと呼称した、又彼らと起居を共にし、もし生まれかわるときにはハリジャンと生まれて抑圧や屈辱と戦いたい―とまでいったそうである。然し翁の亡きあとハリジャンの呼称はその原意を離れて〝不可触民〟の代名詞と化し、その当事者たちの間でも非常に嫌悪されている由である。

次にアンベードカル博士は、ガンジー翁、ネール首相と並ぶ印度三偉人の一人で独立の功労者であるが、仏誕二千五百年祭（一九五六）に「自分は不可触民出身であるが、世の冷たい差別と抑圧にたえて生涯を完う出来たのは、仏陀の平等にして更におへだてなき大悲に支えられたお蔭であった」と讃仰した時、不可触民数十万人が仏教に集団改宗して印度に「新仏教徒」が誕生した。独立して印度共和国憲法が制定された時、博士がその起草委員長として草案を作成して「不可触民制の廃止」を第十七条にあげた。然しこれも結局、憲法の条文にすぎないで、ヒンズー教徒が印度で権力をにぎり、差別を肯定していて、その解放は空文になった。その博士が仏教に改宗し、これに同調して改宗した不可触民は三百八十万人にも達した。博士は改宗して五十三日目に惜しくも世を去った、それは一九五七年十二月六日のことである。それから二十四年を経過した今日、「新仏教徒」の名も、「元ハリジャン」扱いにされているという。

○

以上の記事を読むにつけ、日本でも、明治の新憲法制定の時、「新平民」の名で被差別民を呼ぶようになり、又水平社運動が大正のはじめに提唱された時も、「水平社」の

呼び名が、かえって差別部落の代名詞と転じた。印度も日本も同様な結果になっている。

ここに大思一番、融和問題への根本的な反省が要請せられる。かねてから私は、外形的、政治的な融和と、内面的、宗教的な融和とに分けて考えている。もとより外形的なことも大切であるが、一時的に終って永続しない。ここにどうしても内面的、自覚的、宗教的なものにならねばならぬ。

この時、アンベードカル博士が、ハリジャン出身でありながら、日常の一挙手一投足にいたるまで徹底的差別と蔑視に堪えて、学界や政界に立って大きな足跡をのこされた尊い体験こそ、この問題解決への曙光と渇仰される。その博士を支え、力を与え続けた仏心の平等の大悲、ここに一人一人が帰することが一番大切である。

聖徳太子は、当時、閥族相争い、職業の差別もきびしい時、自ら仏道を求められて、「我是他非」に固執するが「共是凡夫のみ」と示され、この凡夫の枉（まが）れる心の直うされる道は、二元対立を超え、善悪の凡夫を摂して下さる仏心に篤く帰する他はないと高く掲げられた。

法然上人は、横死された父上の御遺言をうけて入山学道し、四十三歳の時、選択本願の念仏に帰入せられて、「善悪の凡夫を憐憫される」道を受得されたのである。そこに荒武者、熊谷直実も帰し、又直実の殺した敦盛の子も同一念仏に帰して恩讐を超える大道を掲げられたのであった。

○

以上によって差別される者も、差別する者も、自身がへだてごころの除き難いことを省み、この問題解決の原点がそこにあると知らねばならぬ。

最後に、差別撤廃を叫ぶ人達が、その理想だけを提げて自身の脚下を照顧しない声を聞くにつけ、徒らに大空の星に憧れて、到る処で躓き、泥まみれになり、傷だらけになって終らねばならぬ痛ましさを想う。それはいかなる時代にも平和は論ぜられながら、そのまま戦争に走った永い人類の歴史にも見られる。地獄への道は美わしい理想の花で飾られている。

階級差別のことに激しい印度に出世された釈尊が「萬川海に入りて一味、四姓釈氏に帰して一味」と言われ、現にバラモン、士農工商、奴隷、のあらゆる階級の者が、仏陀の下にあって、父母兄弟の如く親しんだのである。

想うに、利害得失のために、集散離合を繰り返えす人生に恒久の友として、生死にも障えられない友情を恵まれるのも、篤敬三宝の水源池から自然に流出する。

念仏詩抄

木村無相

そうじゃがそれは

ある人いわく　　香師＝香樹院徳龍師
〝自力の心をすてて
おおせにしたがいまするで
ござりますか〟
香師おおせに
〝そうじゃ
そうじゃがそれは
わが心ではしたがわれぬ〟

すてようとしても
すてられず
したがおうとするも
ハカライとは――

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

よくよくお聞かせ

香師おおせに
〝よく〳〵聞くと
今ではナニをうたごうて
おりましたやらと
如来さまにおすがり申すまンまが
信心決定じゃ
これ一つさえワケがわかったら
日本国がひっくりかえっても

お浄土まいりにまちがいはない〟

よく〳〵お聞かせ下されて
よく〳〵お聞かせ下されて
よく〳〵お聞かせ下されて

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

出離の強縁（ごうえん）

香師おおせに
〝出離の強縁――
強（ごう）はツヨイというて
イヤでもオウでもムリヤリに
というほどのこころじゃ
われらが浄土まいりは
強縁によりて参るのじゃ――〟

わがチカラでは参られぬ
わがオモイでは参られぬ
ああ
出離の強縁〟
これ一つ――

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

――○――○――

法信抄

…私は、今回の退院は前二回の時とちがって「体力」と「視聴力」グッと弱りまして、九月二十日退院後、二十三日、二十六日、十月三日と各地から毎月の人々が御法談に来られましたが、病院と同じくヨコになって、それ〳〵三時間半ぐらいづつ御縁にあわせて貰いました。声は相変らずの大声で、一見元気そうでありますので、皆さん「思ったより元気」と喜んで下さいますが、御本人としては精一杯であります。まだ新聞、テレビも半分程は見え、おくれますが返信も出来、法談もさせて頂けありがたいことです。

註ところが十月十六日朝「すこし調子がよくないので、再度林病院に入院となりました」との電話。驚きながら御手事を祈念しております。

あとがき

師走も近づきました。近角先生の御忌日は、太平洋戦争の始まる数日前でありました。この時「智愚の毒を減す」との如来の誓願の不思議な恵みをたたえて下さいましたものを頂きました。普通我々は賢くなりたいと努力していますが、煩悩に障えられて、智者は慢心、愚者は愚痴におちてあたりに毒をまき散らします。しかもその煩悩の始末のつかぬ身は、いつまでも自害・害彼の修羅場のさまよいから出られません。それでいて我々はその自覚もなく我他彼此の争いを何時までも続けるのを見そなわす如来大悲の誓願の大海のみが、大小、清濁の萬川を一味の潮に転じる海水の如くに、智愚の毒を滅して下さるのであります。

九月廿二、三日には、北米のスミス大学の教授、海野大徹様に導かれた三十人ばかりのハワイの同朋と法話会を催させて頂きましたが、私の中心の願いは、この二元対立して対立抗争のやまぬ人生に、絶対無碍の光益を共に信味させて頂くようにとの一点にありました。

信の上に立脚されて教育問題に終始せられた福島先生の学問と信仰についての正しい見解を述べて下さったものを掲げさせていただきました。とかく自分は学者でないからと、こうした問題を敬遠し勝ちでありますが、知った覚えたに執着する心のやまぬ身は、学問の有無を問わず、へだてのやまぬ泥沼の彷徨がやみません。

西元様は、七旬を迎えられて、御自分の墓地選定の有様を詳説して下さり、ほほえましい御夫妻の姿を想い起しました。

井上様は、人間の絶対信を求めずにはいられない心理過程を自問自答の形で述べて下さいました。池山先生は或時「南無阿弥陀仏」のお名号も六字、西岸上の阿弥陀仏の喚び声も「一心正念直来」の六字、そのお呼びかけ下さるおこころが「オネガイダカラスグキテオクレヨ」、迷い子の帰りを股ずりして待つ母の心になぞらえての意訳をして下さいましたことを思い合わせました。

木村さんは、再び林病院に入院の由、十月十六日朝電話がありました。唯々御恢復をと願っております。

＜おわび＞

今回、私事、膀胱腫瘍の再発のため一ケ月ばかり名大附属病院に入院加療することになりましたので本年一杯は勝手ながら法話を休ませていただきます。来年順調でしたら第二日曜午后一時半から月一回開かせいただきたいと願っております。

又「慈光」も十二月と一月号を休刊させて頂きます、御諒承願います。

花田　謹記

慈光　第三十三巻　第十一号　昭和五六年十一月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可

定価　半年　八〇〇円（送共）
一年　一六〇〇円（送共）
編集・発行人　名古屋市南区駈上町二ノ八八　花田正夫
電話八二一局七〇三七番
印刷人　愛知県西加茂郡三好町大字福谷　坂部光雄
発行所　名古屋市南区駈上町二ノ八八　慈光社
振替口座　名古屋一〇四七〇番
郵便番号　四五七